

研究ノート

大学生の高齢者イメージに関連する要因
— 認知症高齢者と健常高齢者のイメージの比較 —

奥村 由美子

川崎医療福祉大学 医療福祉学部

久世 淳子

日本福祉大学 健康科学部

Factors related to the students' image of elderly people
- Comparison of the image of elderly with dementia and healthy elderly -

OKUMURA, Yumiko

Faculty of Health and Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare

KUZE, Junko

Faculty of Health Sciences, Nihon Fukushi University

本研究では、加齢および高齢者に関する知識とイメージ測定方法を検討するために行ってきた調査の中から、認知症高齢者および健常高齢者へのイメージについてどのような要因が影響を及ぼしているのかを紹介する。大学生は、健常高齢者に比べて認知症高齢者に対して否定的なイメージをもっていた。高齢者イメージには、親や祖父母の望ましい態度や身近なかかわりが影響する可能性があり、とくに認知症高齢者のイメージには、祖父母に限らず、高齢者全般に対するかわり経験や肯定的感情を持っていること、親や祖父母の態度が関連する可能性が示された。人格を形成する過程での様々な高齢者との柔軟なかかわり経験や、世代間の思いやりのある交流などが重要であると考えられた。

Keywords: 高齢者, 認知症, イメージ

1. はじめに

高齢社会においては、様々な世代が高齢者とのより良い関係を築き、ともに暮らしていくことが望まれる。高齢者に対する他世代の認識をあらわす「高齢者観」の中でも、いわゆる「高齢者」のイメージについては、これまでも多くの検討がされてきた。様々な世代が高齢者に対して肯定的イメージを持っていることが望ましいと考えられるが、大学生を対象とした調査では彼らが否定的なイメージを持っていることが知られている。たとえば、保坂ら¹⁾は、大学生を対象とした高齢者イメージ

研究において、大学生の高齢者に対する主なイメージは否定的なものであることとともに、家庭や地域における高齢者とのかかわり方が高齢者イメージに影響することを指摘している。また、大学生の高齢者イメージは、「内面的なあたたかさ」に比べると「外見の活発さ」は否定的に評価されるというような、着目する側面によって評価が異なるということが古谷野²⁾によって指摘されている。

昨今では、認知症高齢者の著しい増加にともない、認知症高齢者への理解を深めることも重要になっている。

従来行われてきた高齢者イメージの研究の多くは、主に高齢者全般について児童や生徒、学生のもつイメージが検討されたものであり^{1,3-10)}、認知症高齢者や健常高齢者など、その高齢者の状態像を加味した検討はほとんどみられない。高齢者の状態像が異なれば、イメージや、その形成に関連する要因が異なる可能性もあると考えられる。認知症高齢者に関しては、介護従事者が認知症高齢者に肯定的なイメージをもつことが、介護の質を高める可能性も指摘されている¹¹⁻¹³⁾ように、実際の介護への影響をもたらすという点からも、高齢者の状態像を考慮した高齢者イメージを検討する必要があると考えられる。

筆者らは、様々な世代が高齢者への理解を深めるための教育のあり方を検討するために、加齢および高齢者に関する知識とイメージ測定方法の検討を行っている。本研究では、これまで調査を行ってきた中から、認知症高齢者および健常高齢者へのイメージについてどのような要因が影響を及ぼしているのかを紹介する。

2. 方法

2.1 調査対象者

医療福祉系大学で心理学関連の科目を受講する学生を対象に、高齢者イメージに関する質問紙調査を実施した。調査対象者は2-4年生485名で、性別は、男性220名、女性265名、年齢は18-28歳で平均年齢(標準偏差)は20.10(1.01)歳であった。このうち、高齢者との同居経験のある者は、241名(49.7%)、認知症高齢者と実際にかかわったことがある者は150名(30.9%)であった。

2.2 調査方法

2.2.1 調査項目

調査対象者の基本属性以外に、(1)認知症に関する知識、(2)認知症高齢者に対するイメージ、(3)健常高齢者に対するイメージ、(4)高齢者とのかかわり経験についてたずねた。本研究では、認知症および高齢者に関する項目のうち、(2)から(4)について検討する。

(1) 認知症に関する知識

認知症に関する主観的な知識、および認知症に関する知識をたずねる項目(本間¹⁴⁾、杉原ら¹⁵⁾を参考に作成)を用いた。

(2) (3) 認知症高齢者、および健常高齢者に対するイメージ

それぞれのイメージは、先行研究で用いられた3種類の方法を用いて測定した。

①保坂ら¹⁾が高齢者イメージを測定するために用いた「単純な-複雑な」、「弱々しい-たくましい」、「貧しい-豊かな」、「劣った-優れた」、「感情的-理性的」などの形容詞対50対(以下、SD法)について、7件法でたずねた。

②奥村ら¹⁶⁾の認知症高齢者のイメージ(以下、認知症高齢者イメージ)は、「意欲的である-意欲的ではない(意欲的)」、「物事や周囲への関心が高い-物事や周囲に無関心である(関心)」、「感情表現が豊かである-感情表現が乏しい(感情表現)」、「自立的である-依存적である(自立)」、「穏やかである-感情の起伏がはげしい(穏やか)」、「周囲に配慮する-自己中心的である(配慮)」、「人と信頼関係を築くことができる-疑い深い、ひがみっぽい(信頼)」、「自分について肯定的である-自分について否定的である(自己肯定)」、「落ち着いている-落ち着きがない(落ち着き)」という9項目からなり、この9項目について6件法でたずねた。

③認知症の認識に関わる9項目(以下、認知症の認識)については、本間¹⁴⁾、杉原ら¹⁵⁾の用いた13項目からイメージを測定する「誰もがなる可能性がある」、「身近に感じられる」、「悲しい」、「怖い」、「お先真っ暗だと思おう(お先真っ暗)」、「恥ずかしい」、「大切にされない」、「苦しい」、「自分には関係ない」という9項目を選び、3件法でたずねた。

(4) 高齢者とのかかわり

高齢者とのかかわり経験については、高齢者とのかかわり(高齢者とのかかわり、祖父母との同居経験など)、高齢者への肯定的感情(高齢者への関心、祖父母や高齢者が好きなど)、親や祖父母の態度への評価(親の、祖父母に対する態度に思いやりを感じたなど)をたずねた。

2.2.2 調査方法

2006-2007年に、心理学関係の講義中に集団で実施した。

2.3 分析方法

3種類のイメージ測定法について、認知症高齢者と健常高齢者のイメージを比較するために、両者に対する回答をあわせて因子分析を行った(主因子法、プロマックス回転)。それぞれの因子について、クロンバックのアルファ係数(Cronbach's α)を算出し、因

子の信頼性を確認した。さらに、抽出された因子の因子得点を用いて、大学生の認知症高齢者と健常高齢者のイメージ、および、それぞれのイメージと高齢者とのかかわりなどとの関連をt検定により検討した。

なお、本研究の分析には、SPSS16.0J for Windowsを用いた。

3. 結果

3.1 イメージ項目の因子分析結果

3種類のイメージ測定法それぞれの、認知症高齢者と健常高齢者のイメージの回答について因子分析を行った。因子の数は、スクリープロットや解釈可能性を考慮して決定し、いずれの因子においても因子負荷量が0.35以上を採用した。因子分析により得られた回転後の因子負荷量を、表1から表3に示した。

まず、50対の「SD法」については、3因子が抽出された(表1)。第1因子は「愚かな－賢い」、「低俗な－高尚な」などの項目からなり、「統合性」因子と命名された(Cronbach's $\alpha = .915$)。第2因子は「受動的－能動的」、「保守的－進歩的」などの項目からなり、「能動性」因子と命名された(Cronbach's $\alpha = .858$)。第3因子は、「いばった－へりくだった」、「強情な－素直な」などの項目からなり、「柔軟性」因子と命名された(Cronbach's $\alpha = .604$)。

「認知症高齢者イメージ」については、2因子が抽出された(表2)。第1因子は「落ち着いている－落ち着きがない(落ち着き)」、「穏やかである－感情の起伏がはげしい(穏やか)」などの項目からなり、「円熟性」因子と命名された(Cronbach's $\alpha = .904$)。第2因子は「物事や周囲への関心が高い(関心)」、「意欲的である－意欲的ではない(意欲的)」などの項目からなり、「積極性」因子と命名された(Cronbach's $\alpha = .840$)。

また、「認知症の認識」については、2因子が抽出された(表3)。第1因子は「怖い」、「悲しい」などの項目からなり、「否定性」因子と命名された(Cronbach's $\alpha = .823$)。第2因子は「恥ずかしい」、「お先真っ暗だと思(お先真っ暗)」などの項目からなり、「実現性」因子と命名された(Cronbach's $\alpha = .747$)。

なお、いずれも、因子得点が高い方が肯定的イメージをあらわすようにした。

表1. 「SD法」の因子分析結果
(主因子法・プロマックス回転)

項目/因子	第1因子 統合性	第2因子 能動性	第3因子 柔軟性
愚かな	.915	-.069	-.090
低俗な	.909	-.163	-.028
貧弱な	.797	.039	-.027
不幸な	.743	.028	.026
だらしない	.719	.061	-.064
きたない	.661	.008	.074
魅力のない	.645	.023	.114
疎遠な	.577	.096	.090
狭い	.564	.052	.183
受動的	-.025	.726	-.145
保守的	-.203	.700	.137
遅い	-.049	.679	.068
消極的	.159	.673	-.162
暇そう	-.003	.585	-.059
地味な	-.028	.568	.054
内向的	.291	.544	-.062
鈍い	-.003	.537	.085
不自由な	.254	.485	-.005
いばった	-.008	-.134	.580
強情な	.145	.051	.511
固い	.113	.119	.491
因子寄与	7.445	6.233	3.575

表2. 「認知症高齢者イメージ」の因子分析結果
(主因子法・プロマックス回転)

項目/因子	第1因子 円熟性	第2因子 積極性
落ち着き	.862	-.028
穏やか	.838	-.042
配慮	.815	.053
信頼	.801	.074
関心	-.090	.908
意欲的	.139	.744
感情表現	.031	.695
因子寄与	3.623	3.072

表3. 「認知症の認識」の因子分析結果
(主因子法・プロマックス回転)

項目/因子	第1因子 否定性	第1因子 実現性
怖い	.868	.011
悲しい	.743	.042
苦しい	.736	-.048
恥ずかしい	-.137	.837
お先真っ暗	.251	.597
大切にされない	.105	.544
因子寄与	2.683	2.364

3.2 認知症高齢者と健常高齢者のイメージの比較

因子分析により抽出された7因子の因子得点を用いて、大学生の、認知症高齢者と健常高齢者のイメージをt検定により比較したところ、統合性 ($t_{(443)}=-21.107$, $p=.000$), 能動性 ($t_{(443)}=-18.157$, $p=.000$), 柔軟性 ($t_{(443)}=-12.263$, $p=.000$), 円熟性 ($t_{(470)}=-28.341$, $p=.000$), 積極性 ($t_{(470)}=-22.076$, $p=.000$), 否定性 ($t_{(471)}=-25.564$, $p=.000$), 実現性 ($t_{(471)}=-15.119$, $p=.000$) のいずれについても有意差が認められ、認知症高齢者よりも健常高齢者についての因子得点が高かった (表4)。

3.3 イメージと関連する要因

次に、認知症高齢者、健常高齢者のイメージについて、高齢者とのかかわり経験 (近隣とのつきあい、祖父母との同居など)、肯定的感情 (高齢者への関心、祖父母や高齢者が好きなど)、親や祖父母への評価 (親の、祖父母に対する態度に思いやりを感じたなど) との関連について検討した (表5, 表6)。なお、「近隣の高齢者とのつきあい」、「高齢者と接する機会」、「高齢者への関心」については、「あり」と「どちらともいえない・なし」の2群で比較したが、表には「あり」「なし」と示した。また、「祖父母が好きである」、「高齢者が好きである」、「親の、祖父母への態度を見て思いやりを感じる」、「親の、祖父母以外の高齢者への態度を見て思いやりを感じる」、「祖父母の、親への態度を見て思いやりを感じる」については、「はい」と「どちらともいえない・いいえ」の2群で比較したが、表には「はい」「いいえ」と示した。

3.1.1 認知症高齢者のイメージ

認知症高齢者のイメージについては、高齢者とのかかわりのうち「高齢者と接する機会」の有無によって統合性 ($t_{(457)}=2.031$, $p=.043$), 円熟性 ($t_{(474)}=2.069$, $p=.039$), 積極性 ($t_{(255,078)}=3.128$, $p=.002$), 実現性 ($t_{(477)}=2.698$, $p=.007$) に有意差がみられ、いずれも、高齢者と接する機会が多かったと感じている方が少なかったと感じている場合よりも得点が高かった。「認知症高齢者とのかかわり」によって統合性 ($t_{(355,233)}=4.153$, $p=.000$), 柔軟性 ($t_{(454)}=2.553$, $p=.011$), 積極性 ($t_{(471)}=2.535$, $p=.012$), 実現性 ($t_{(474)}=2.145$, $p=.032$) に有意差がみられ、いずれも認知症高齢者とのかかわり経験がある方が、ない場合よりも得点が高かった。「奉仕活動」によって統合性 ($t_{(449,780)}=3.561$, $p=.000$), 柔軟性 ($t_{(455)}=3.577$,

$p=.000$), 円熟性 ($t_{(470)}=3.060$, $p=.002$), 実現性 ($t_{(474)}=3.926$, $p=.000$) で有意差がみられ、いずれも奉仕活動経験がある方がない場合よりも得点が高かった。「高齢者との活動」によって統合性 ($t_{(450)}=2.321$, $p=.021$), 柔軟性 ($t_{(450)}=2.275$, $p=.023$), 円熟性 ($t_{(466)}=3.261$, $p=.001$), 否定性 ($t_{(469)}=2.131$, $p=.034$), 実現性 ($t_{(469)}=3.701$, $p=.000$) で有意差がみられ、いずれも、高齢者との活動経験がある方がない場合よりも得点が高かった。

肯定的感情に関しては、「高齢者への関心」の有無によって否定性 ($t_{(477)}=-2.184$, $p=.029$), 実現性 ($t_{(477)}=3.324$, $p=.001$) で有意差がみられていたが、否定性については高齢者への関心がない方がある場合よりも得点は高く、実現性については、高齢者への関心がある方がない場合よりも得点が高かった。「高齢者が好き」によって統合性 ($t_{(398,547)}=4.546$, $p=.000$), 能動性 ($t_{(455)}=2.223$, $p=.027$), 柔軟性 ($t_{(455)}=3.639$, $p=.000$), 円熟性 ($t_{(472)}=3.355$, $p=.001$), 積極性 ($t_{(472)}=3.947$, $p=.000$), 否定性 ($t_{(471,962)}=2.343$, $p=.020$), 実現性 ($t_{(475)}=5.302$, $p=.000$) で有意差が認められ、高齢者を好きである方が好きではない場合よりも得点が高かった。

親や祖父母への評価に関しては、「親の、他的高齢者への態度」によって統合性 ($t_{(319,043)}=2.728$, $p=.007$), 円熟性 ($t_{(462)}=3.503$, $p=.001$), 積極性 ($t_{(462)}=3.962$, $p=.000$), 実現性 ($t_{(464)}=3.478$, $p=.001$) で有意差がみられ、祖父母以外の高齢者に対する親の態度に思いやりを感じている方が、感じていない場合よりも得点が高かった。「祖父母の、親への態度」によって柔軟性 ($t_{(452)}=2.381$, $p=.018$), 円熟性 ($t_{(469)}=3.012$, $p=.003$), 積極性 ($t_{(469)}=2.308$, $p=.021$) で有意差が認められ、親に対する祖父母の態度に思いやりを感じている方が、感じていない場合よりも得点が高かった。しかし、「近隣高齢者とのつきあい」、「同居経験」、「祖父母が好き」、「親の、祖父母への態度」については、いずれの因子においても認知症高齢者のイメージとの関連は認められなかった。

3.1.2 健常高齢者のイメージ

健常高齢者のイメージでは、高齢者とのかかわりに関しては、「高齢者と接する機会」の有無によって統合性 ($t_{(459)}=2.166$, $p=.031$) で有意差がみられ、高齢者と接する機会が多かったと感じている方が少なかったと感じている場合よりも得点が高かった。「奉仕活動」の有無によって柔軟性 ($t_{(458)}=1.994$, $p=.047$), 否定性

表4. 認知症高齢者と健常高齢者のイメージの比較

	統合性		能動性		柔軟性		円熟性		積極性		否定性		実現性	
	平均値	t 値												
認知症高齢者	-0.57		-0.48		-0.30		-0.63		-0.53		-0.56		-0.32	
健常高齢者	0.59	-21.107***	0.49	-18.157***	0.31	-12.263***	0.64	-28.341***	0.54	-22.076***	0.57	-25.564***	0.34	-15.119***

t検定, ***p<.001

表5. 認知症高齢者イメージと関連する要因

関連項目	イメージ	統合性		能動性		柔軟性		円熟性		積極性		否定性		実現性	
		平均値	t 値	平均値	t 値	平均値	t 値	平均値	t 値	平均値	t 値	平均値	t 値	平均値	t 値
<高齢者とのかわり> 近隣高齢者とのつきあい	あり	-0.57		-0.37		-0.37		-0.63		-0.44		-0.61		-0.20	
	なし	-0.63	0.570	-0.51	1.449	-0.34	-0.282	-0.72	1.027	-0.60	1.603	-0.71	1.029	-0.33	1.239
高齢者と接する機会	あり	-0.47		-0.39		-0.32		-0.53		-0.35		-0.49		-0.18	
	なし	-0.62	2.031*	-0.52	1.618	-0.30	-0.213	-0.68	2.069*	-0.61	3.128**	-0.60	1.763	-0.40	2.698**
認知症高齢者とのかわり	あり	-0.39		-0.41		-0.17		-0.61		-0.39		-0.53		-0.21	
	なし	-0.66	4.153***	-0.52	1.400	-0.37	2.553*	-0.65	0.561	-0.60	2.535*	-0.59	0.851	-0.38	2.145*
奉仕活動	あり	-0.44		-0.47		-0.16		-0.52		-0.45		-0.51		-0.17	
	なし	-0.67	3.561***	-0.47	0.063	-0.41	3.577***	-0.73	3.060**	-0.59	1.967	-0.62	1.827	-0.46	3.926***
高齢者との活動	あり	-0.48		-0.48		-0.21		-0.51		-0.48		-0.49		-0.17	
	なし	-0.64	2.321*	-0.46	-0.164	-0.37	2.275*	-0.73	3.261**	-0.56	1.054	-0.63	2.131*	-0.45	3.701***
同居経験	あり	-0.59		-0.53		-0.31		-0.67		-0.57		-0.52		-0.29	
	なし	-0.55	-0.554	-0.43	-1.313	-0.29	-0.274	-0.61	-0.802	-0.51	-0.882	-0.61	1.488	-0.36	1.024
<肯定的感情> 高齢者への関心	あり	-0.56		-0.46		-0.32		-0.65		-0.49		-0.67		-0.15	
	なし	-0.58	0.337	-0.49	0.337	-0.30	-0.264	-0.62	-0.422	-0.55	0.665	-0.52	-2.184*	-0.41	3.324**
祖父母が好き	はい	-0.55		-0.48		-0.29		-0.61		-0.52		-0.57		-0.31	
	いいえ	-0.70	1.559	-0.49	0.160	-0.40	1.081	-0.76	1.570	-0.60	0.790	-0.56	-0.074	-0.45	1.394
高齢者が好き	はい	-0.42		-0.40		-0.18		-0.53		-0.39		-0.50		-0.15	
	いいえ	-0.73	4.546***	-0.56	2.223*	-0.44	3.639***	-0.75	3.355**	-0.68	3.947***	-0.65	2.343*	-0.53	5.302***
<親や祖父母への評価> 親の、祖父母への態度	はい	-0.58		-0.49		-0.28		-0.60		-0.51		-0.55		-0.29	
	いいえ	-0.57	-0.122	-0.45	-0.626	-0.34	0.789	-0.69	1.228	-0.58	0.904	-0.60	0.781	-0.42	1.673
親の、他の高齢者への態度	はい	-0.49		-0.44		-0.25		-0.55		-0.41		-0.55		-0.23	
	いいえ	-0.68	2.728**	-0.51	0.970	-0.37	1.656	-0.79	3.503**	-0.71	3.962***	-0.59	0.710	-0.50	3.478**
祖父母の、親への態度	はい	-0.54		-0.49		-0.24		-0.56		-0.47		-0.58		-0.32	
	いいえ	-0.63	1.122	-0.45	-0.449	-0.43	2.381*	-0.79	3.012**	-0.66	2.308*	-0.53	-0.783	-0.34	0.189

t検定, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

表6. 健常高齢者イメージと関連する要因

関連項目	イメージ	統合性		能動性		柔軟性		円熟性		積極性		否定性		実現性	
		平均値	t 値	平均値	t 値	平均値	t 値	平均値	t 値	平均値	t 値	平均値	t 値	平均値	t 値
<高齢者とのかわり> 近隣高齢者とのつきあい	あり	0.54		0.45		0.28		0.63		0.54		0.70		0.51	
	なし	0.54	-0.010	0.46	-0.130	0.34	-0.692	0.56	0.881	0.46	0.878	0.61	1.090	0.39	1.426
高齢者と接する機会	あり	0.70		0.52		0.33		0.68		0.59		0.61		0.42	
	なし	0.51	2.166*	0.46	0.685	0.29	0.450	0.62	0.980	0.51	1.157	0.56	0.718	0.30	1.458
認知症高齢者とのかわり	あり	0.61		0.46		0.30		0.59		0.49		0.67		0.40	
	なし	0.55	0.687	0.48	-0.276	0.30	-0.035	0.66	-1.076	0.55	-0.817	0.54	1.717	0.31	1.109
奉仕活動	あり	0.64		0.45		0.38		0.70		0.57		0.69		0.46	
	なし	0.51	1.629	0.49	-0.505	0.24	1.994*	0.59	1.821	0.50	0.946	0.49	2.823**	0.25	2.836**
高齢者との活動	あり	0.69		0.53		0.38		0.70		0.58		0.64		0.44	
	なし	0.47	2.839**	0.43	1.218	0.24	2.066*	0.58	1.940	0.50	1.227	0.53	1.501	0.26	2.416*
同居経験	あり	0.65		0.51		0.29		0.71		0.60		0.61		0.38	
	なし	0.50	1.909	0.44	0.927	0.31	-0.264	0.56	2.446*	0.46	2.106*	0.55	0.908	0.30	1.101
<肯定的感情> 高齢者への関心	あり	0.66		0.51		0.34		0.68		0.61		0.76		0.54	
	なし	0.53	1.381	0.46	0.598	0.28	0.723	0.62	0.911	0.49	1.674	0.48	4.015***	0.24	4.046***
祖父母が好き	はい	0.62		0.49		0.35		0.67		0.54		0.60		0.38	
	いいえ	0.28	3.608***	0.39	0.896	0.05	3.065**	0.44	2.574*	0.51	0.375	0.40	1.971*	0.05	2.867**
高齢者が好き	はい	0.67		0.51		0.41		0.74		0.56		0.70		0.50	
	いいえ	0.46	2.780**	0.44	0.803	0.18	3.278**	0.52	3.530***	0.50	0.949	0.43	3.648***	0.14	4.713***
<親や祖父母への評価> 親の、祖父母への態度	はい	0.63		0.50		0.42		0.69		0.57		0.60		0.40	
	いいえ	0.46	2.055*	0.43	0.958	0.08	4.588***	0.52	2.582*	0.44	1.862	0.50	1.352	0.20	2.331*
親の、他の高齢者への態度	はい	0.63		0.46		0.35		0.67		0.53		0.63		0.43	
	いいえ	0.52	1.393	0.53	-0.955	0.24	1.624	0.60	0.990	0.52	0.137	0.48	1.961	0.19	2.858**
祖父母の、親への態度	はい	0.64		0.49		0.42		0.71		0.56		0.62		0.40	
	いいえ	0.41	2.722**	0.45	0.475	0.02	5.254***	0.46	3.558***	0.46	1.326	0.45	2.074*	0.16	2.865**

t検定, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

($t_{(463.860)}=2.823, p=.005$), 実現性 ($t_{(465.603)}=2.836, p=.005$) で有意差がみられ, いずれも奉仕活動経験がある方がない場合よりも得点が高かった。「高齢者との活動」は, 統合性 ($t_{(453)}=2.839, p=.005$), 柔軟性 ($t_{(453)}=2.066, p=.039$), 実現性 ($t_{(452.298)}=2.416, p=.016$) で有意差がみられ, いずれも, 高齢者との活動経験がある方がない場合よりも得点が高かった。「同居経験」は, 円熟性 ($t_{(470)}=2.446, p=.015$), 積極性 ($t_{(470)}=2.106, p=.036$) で有意差がみられ, 同居経験がある方がない場合よりも得点が高かった。

肯定的感情に関しては, 「高齢者への関心」の有無によって否定性 ($t_{(395.332)}=4.015, p=.000$), 実現性 ($t_{(387.451)}=4.046, p=.000$) について有意差がみられ, 高齢者への関心がある方がない場合よりも得点が高かった。「祖父母が好き」は, 統合性 ($t_{(106.586)}=3.608, p=.000$), 柔軟性 ($t_{(459)}=3.065, p=.002$), 円熟性 ($t_{(472)}=2.574, p=.010$), 否定性 ($t_{(471)}=1.971, p=.049$), 実現性 ($t_{(90.811)}=2.867, p=.005$) で有意差が認められ, 祖父母を好きである方が好きではない場合よりも得点が高かった。「高齢者が好き」については, 統合性 ($t_{(457)}=2.780, p=.006$), 柔軟性 ($t_{(457)}=3.278, p=.001$), 円熟性 ($t_{(442.143)}=3.530, p=.000$), 否定性 ($t_{(428.781)}=3.648, p=.000$), 実現性 ($t_{(431.754)}=4.713, p=.000$) で有意差が認められ, 高齢者を好きである方が好きではない場合よりも得点が高かった。

親や祖父母への評価に関しては, 「親の, 祖父母への態度」によって統合性 ($t_{(456)}=2.055, p=.040$), 柔軟性 ($t_{(456)}=4.588, p=.000$), 円熟性 ($t_{(470)}=2.582, p=.010$), 実現性 ($t_{(469)}=2.331, p=.020$) で有意差が認められ, 祖父母に対する親の態度に思いやりを感じている方が感じていない場合よりも得点が高かった。「親の, 他的高齢者への態度」については, 実現性 ($t_{(345.660)}=2.858, p=.005$) で有意差がみられ, 祖父母以外の高齢者に対する親の態度に思いやりを感じている方が, 感じていない場合よりも得点が高かった。「祖父母の, 親への態度」については統合性 ($t_{(454)}=2.722, p=.007$), 柔軟性 ($t_{(454)}=5.254, p=.000$), 円熟性 ($t_{(468)}=3.558, p=.000$), 否定性 ($t_{(467)}=2.074, p=.039$), 実現性 ($t_{(467)}=2.865, p=.004$) で有意差が認められ, 親に対する祖父母の態度に思いやりを感じている方が, 感じていない場合よりも得点が高かった。しかし, 「近隣高齢者とのつきあい」と「認知症高齢者とのかかわり」については, いずれの因子においても関連は認められなかった。

4. 考察

4.1 認知症高齢者と健常高齢者

認知症高齢者と健常高齢者のイメージは, いずれの因子についても認知症高齢者よりも健常高齢者のイメージの得点が高く, 健常高齢者のイメージの方が肯定的であることが示された。このことから, 高齢者の状態像が異なれば, イメージには違いがあることが示唆された。

4.2 認知症高齢者と健常高齢者のイメージに関連する要因

4.2.1 高齢者とのかかわり経験

近隣の高齢者とのつきあいがあることそのものは, 認知症高齢者, 健常高齢者のいずれのイメージにも関連はなく, 高齢者とかかわる機会が多いと感じていたり, 奉仕活動や高齢者との活動をしているなど, 実際に意図的に高齢者にかかわることが, 認知症高齢者と健常高齢者のイメージに関連することが示された。

同居経験も高齢者とのかかわり経験のひとつであるが, 従来のイメージ研究では, 祖父母との同居経験そのものは高齢者イメージとの関連は認められてこなかった^{3,10}。本研究では, 健常高齢者の「円熟性」, 「積極性」のイメージについては同居経験と関連していた。このことから, 同居という身近なかかわりをとおして, 健常高齢者が落ち着いて, 穏やかに, 周囲に配慮し, また他者との信頼関係を築きながら過ごすという円熟的な側面と, 周囲のことに関心をもち, 意欲的に, 感情表現豊かに過ごすという積極的な側面への理解を深めることができる可能性があることが示された。つまり, 同居経験との関連の有無は, そのイメージの内容によるのではないかと考えられた。

また, 認知症高齢者とのかかわり経験は, 認知症高齢者へのイメージと関連するにとどまり, 健常高齢者のイメージには反映されない可能性も示された。

4.2.2 高齢者への肯定的感情

祖父母が好きであることについては, 健常高齢者へのイメージとの関連のみにとどまった。祖父母に限らず高齢者が好きであることや高齢者に関心があることは, 健常高齢者のイメージとの関連だけではなく, 認知症高齢者のイメージとも関連することが示された。

4.2.3 親や祖父母の態度への評価

親の, 祖父母に対する態度に思いやりを感じること

は、健常高齢者のイメージとの関連のみにとどまった。しかし、親の、祖父母以外の高齢者に対する態度や、祖父母の、親に対する態度に思いやりを感じることは、健常高齢者のイメージだけでなく認知症高齢者のイメージにも関連する可能性が示された。

4.2.4 健常高齢者と認知症高齢者のイメージに関連する要因の違い

健常高齢者のイメージは、身近な祖父母とのかかわりをもつことによって形成される可能性があることが示された。その一方で、認知症高齢者のイメージについては、祖父母に限らず、より広い関係性にある高齢者へのかかわり経験や肯定的感情、親の態度と関連しており、発達過程において様々な高齢者と柔軟なかかわりをもつことや、周囲のおとなも望ましい態度をとることの必要性が示唆されたと考えられた。

今回の検討では、健常高齢者、認知症高齢者のいずれのイメージについても、高齢者との活動や奉仕活動など、実際の意図的なかかわり経験を持っている方が、経験がない場合よりもイメージが肯定的であった。看護学生が高齢者にかかわる実習をとおして、高齢者への理解が深まったという報告¹⁷⁻¹⁸⁾、あるいは認知症高齢者への非薬物療法のひとつである回想法の実施にかかわった介護専門職が、回想法に参加する認知症高齢者の日頃のない生き生きとした表情や態度にふれて、イメージが肯定的に変化したことや、日常業務にも前向きに取り組むようになったという報告¹²⁾と同様に、意図的に高齢者と実際のかかわりをもつことが高齢者への理解を深めるという可能性が本研究でも示されたといえる。認知症高齢者に関しては、今回分析対象とした学生が実際に認知症高齢者にかかわったことがほとんどなく、今後のかかわりの有無によってイメージが変化する可能性があることも考えられた。

5. まとめ

本研究では、医療福祉系大学において心理学関連の科目を受講する学生を対象に、健常高齢者と認知症高齢者のイメージを測定し、高齢者とのかかわり経験との関連を比較した。その結果、健常高齢者のイメージとくらべて、認知症高齢者のイメージは否定的であった。また、イメージの内容やイメージに関連する要因は認知症高齢者と健常高齢者では異なっていたが、主に親や祖父母の望ましい態度や身近なかかわりが影響する可能性がある

ことが示された。とくに認知症高齢者のイメージには、祖父母に限らず、高齢者全般に対するかかわり経験や肯定的感情を持っていること、また親や祖父母の態度が関連する可能性が示されていた。これらのことから、人格を形成する過程での様々な高齢者との柔軟なかかわり経験や、世代間の思いやりのある交流などが重要であると考えられる。

今後の高齢社会において、他の世代が様々な状態にある高齢者とともに地域で過ごし、さらには介護にもたずわる可能性が高まっていく。人格形成の過程で、あるいは他の何らかの機会に高齢者とのより良いかかわりがもたれ、肯定的なイメージが形成されることが高齢者と円滑に過ごせる可能性を高めるのではないかと考える。

謝辞

本研究は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)「加齢および高齢者に関する知識とイメージを測定するテストの開発」(代表者:奥村由美子)の助成を受けて行った。記して深謝します。

引用文献

- 1) 保坂久美子, 袖井孝子: 大学生の老人イメージ - SD法による分析 -. 社会老年学, 27, pp. 22-33 (1988)
- 2) 古谷野亘: 通年講義による高齢者観の変容; 専門科目「高齢者福祉論」の場合. 桃山学院大学社会学論集, 23 (2), pp. 1-19 (1990)
- 3) 保坂久美子, 袖井孝子: 大学生の老人観. 老年社会科学, 8, pp. 103-116 (1986)
- 4) 中野いく子, 冷水豊, 中谷陽明, 馬場純子: 小学生と中学生の高齢者イメージ - SD法による測定と比較 -. 社会老年学, 39, pp. 11-22 (1994)
- 5) 馬場純子, 中野いく子, 冷水豊, 中谷陽明: 中学生の高齢者観 - 高齢者観スケールによる測定 -. 社会老年学, 38, pp. 3-12 (1993)
- 6) 遠近三和子: 小学生の高齢者に対するイメージ - 自分の祖父母と“ふつう”のお年寄りとの比較 -. 日本発達心理学会第4回大会発表論文集, pp. 218 (1993)
- 7) 金田千賀子: 子どもが抱く高齢者のイメージ. 医療福祉研究, 2, pp. 1-10 (2006)
- 8) 古谷野亘, 児玉好信, 安藤孝敏, 浅川達人: 中高年の高齢者イメージ - SD法による測定 -. 老年社会

科学, 18 (2), pp. 147 - 152 (1997)

- 9) 久世淳子：青年（学生）の高齢者イメージに関する一考察. 日本福祉大学情報社会科学論集, 第1巻, pp. 9-12 (1997)
- 10) 木村留美子：SD法による“老い”のイメージについて - 壮・老年期を中心に -. 日本心理学会第54回大会発表論文集, pp. 29 (1990)
- 11) 野村豊子：回想法とライフレビュー；その理論と技法. 中央法規, 東京 (1998)
- 12) 奥村由美子, 長谷川妙子, 三原静, 金田貴子, 久世淳子, 谷向知：回想法グループ実施による介護スタッフへの効果について (The effect of the reminiscence group therapy to the professional caregivers). 国際アルツハイマー病協会第20回国際会議抄録集, pp. 261 (2004)
- 13) Yumiko Okumura, Satoshi Tanimukai, Toshiko Kubouchi, Taira Nagatani, Takashi Asada : Effect to professional caregivers of reminiscence group therapy for the elderly with dementia. *International Psychogeriatrics*, 19(1), pp. 344, (2007)
- 14) 本間昭：地域住民を対象とした老年期痴呆に関する意識調査. 老年社会科学, 23 (3), pp. 340-351 (2001)
- 15) 杉原百合子, 山田裕子, 武地一：一般高齢者がもつアルツハイマー型認知症についての知識量と関連要因の検討. 日本認知症ケア学会誌, 4 (1), pp. 9-16 (2005)
- 16) 奥村由美子, 谷向知, 久世淳子：高齢者とのかかわり度合いによる痴呆性高齢者のイメージの違いについて. 老年社会科学, 24 (2), pp. 262 (2002)
- 17) 流石ゆり子, 亀山直子：『健康高齢者実習』の意義 - 学生の実習終了後レポート分析による学習内容の検討 -. 老年看護学, 9 (1), pp. 65-75 (2004)
- 18) 松本啓子, 清田玲子, 池田敏子, 赤木節子, 羽井佐米子, 高田三千代, 松井優子：看護職の考える高齢者の自立に関する意識調査. 老年看護学, 6 (1), pp. 107-113 (2001)